

願心莊嚴

安田理深

世親はその願生偈に於て、如來の世界を、莊嚴功德成就という相を以て表し、それを内容として自己の願生の心を述べている。願生というのであるから、そこには自己の根底にめざめた自覚というものがあるであろう。親鸞の樹心弘誓之仏地というが如き意味のものがあるであろう。自己の根底を忘却していたところの実存が、その根底である存在の本願によつて、存在そのもの呼びかえされた自覚であればこそ、その自覚の心が願生として表白されたのでなければならぬ。そして莊嚴功德成就とは、実存の根底である本願が、呼びさましたところの実存の自覚の内に開示するところの、存在の意味の世界であるということが出来るかと思う。

本願は世界の根源であり、世界は根源の意味開示である。本願は実存に自己を意味の世界として開示することによつて、まさに実存を成就するということが出来るかと思うのである。願は実存の根底として、どこまでも自己を底に超えるとともに、その根底にめざめた自己に於て、全実存を包括する世界となるのである。願は勿論如來の本願であり、世界はどこまでも如來の境界である。然し自覚という限り、それは実存的自己とのかかわりを有ったものでなければならぬ。然らずば如は如たるにとどまつて来ということも出来ないであろう。

超越といふ包括ということは無関係ということではなくして、むしろ絶對的關係である。超えるのは何かを越えて

何かの根拠となる超越的關係であり、包むのは何かを超えたものが何かを生かす世界となる包括關係である。実存が自覚的存在として成就するということは、かかる包越的關係という存在構造にかえるということである。喪失して本来關係を恢復するということである。かかる關係をほかにして存在はないともいい得る。存在とは關係存在である。超越的關係による關係存在としての実存は、いわば如来内存在ということが出来る。

根底となる存在自体が願として存在するということには、人間という実存に取ってそれが覆われたものであるという意義があるであろう。忘却していることは覆われていることである。しかし覆われているのは無ということではない。忘却しているのであれば無というに異ならないともいい得るでもあろう。忘却はやがて喪失である。しかし、それは無となったのではなくして無とされているに過ぎないのである。無ということは実存の側にあるのであって実存の根拠たる存在そのものにあるのではない。存在そのものを忘却している実存もお生きているのである。生きているものも生きている存在の意味を見出さなければ生きていることの意義もなくなるであらう。実存の根底たる存在そのものはそれゆえに、実存が唯だそれにめざめるということ、然もめざめるといふ唯だその一事によってのみ、その根底たる存在そのものを新しく確認し、またその再確認によって確認するもの自身の生きていることの意味を獲得するのである。

実存がいかにその根底を失っても、根底そのものはやはり根底を失った実存の根底である。それが事物存在であらうが全体的存在であらうが、凡そ存在者に取って、あるがままの存在そのものは、それに超越的に根底である。或いは超越的に關係することが根底である。あるがままがあるがままを失わずして、あるがままならざるものにかかわることが根底である。それは実存の側に無としても、それ自身に無であるのではなく、新しくそれを確認しても、確認によって有となったのではない。有を離れ無を離れ、それ自身によってそれ自身を維持するのが、存在が存在のままであることである。

忘却の無ということも、確認の有ということも、すべて実存の自覚に関する事柄である。そして存在が根底であるということが本願ということであろう。根底の超越的關係が、単なる静止的關係でなくして働く關係である場合、それは本願といわざるを得ない。本は根底であるが、根本が働くのが願である。それ自身に有にあらざる無にあらざるものが、よく無として働き有として働くのである。働く根底は願ということが出来る。

勿論、働くといっても、それ自身を失って働くのではない。存在が存在するのである。存在が存在に静止するのではなく、存在が実存に存在するのである。存在はいかなる存在者をもっても自己の本質とするのではない。有にも非らず無にも非らざる本有である。それゆえにこそ、すべての存在者をもって自己自体とするということが出来る。存在は実存に存在することによって、実存を存在せしめるのである。存在が存在のままであることがそのまま実存に存在し、実存を存在せしめることであるのである。存在が存在のままであることはノエシス的にいえば知ることであり存在し、また存在せしめることは悲の働きである。知るままが働くことである。知ることとしての願を願心というならば、働くこととしての願は願力といってもよい。自他不二と知ることの上に自が他となることによって、他を自とする働きが成立つということが出来る。

かかるわけで存在する存在が願であり、根拠する根底が願である。願は覆われた存在である。人間の実存がそれを喪失しても、存在は実存を喪失せぬのである。そこには実存にめざめという唯だ一つの事が要められているのである。実存のめざめを原点として、存在が自覚存在として自己を実現し、実存は実現された存在の意味をもって実存を成就するを得るのである。

かく存在が実存のめざめを待って自己を実現し、実現された意味をもって実現を充足するということは、有の覆われた存在としての願の關係よりいえば、まさに開かれた存在としての願である。覆われたる根底は開かれて世界となるのである。根底たる願が大地と象徴されるのに対応して、開かれたる世界は光を以って象徴されるのは、願によっ

て開示された存在を見るを得るからである。実存が実存を存在する存在と見るを得るからである。実存のままが存在のままであるを見るからである。人間の実存を人間からでなくして、それを底に超えた根拠を以って包摂する関係よりみれば、実存は如来内存在である。如来は願として自己の超越的根拠となり、その根拠にめざましめ、根源にめざました実存に根拠を開示し展開するのである。世界というも根底の外に世界があるのではなく、根底が世界となるのである。

勿論、根底が世界となるのは、前述の如く実存のめざましめによる。然し実存のめざましめを要するということは、如来内存在の存在構造が不完全であることを意味するものではない。如来内存在が如来内存在として現行することである。如来内存在の願が如来内存在の世界として成就することである。ただその為に自覚を必要とするのである。自覚する意識の場を必要とするのである。根底である存在が世界として開かれる場となることの出来る意識を必要とするのである。

願生心の存在論はどこまでも自覚的存在論である。親鸞は世親の願生の一心を廣大無碍の一心というている。存在の如来性を開示している心であるからである。存在のままの心であるからである。世親は願生の心に於て、自己を超えた如来を以て、然も自己自身を表現しているのである。自己は主観的自己を底に破ることによって、却って無底の根拠を以て自己となす主体的自己であることをうるのである。然も自己であるを得た心にのみ、如来ならざるはなき世界は与えられる。如来のままなる事物に遇うといってもよいかと思う。主体的自己であることの出来る意識は、同時にまた如来の世界が与えられることの出来る意識である。

如来として世界は、最初に述べた如く、莊嚴功德成就を相とする世界である。自己の根底が自己に開く世界が功德の成就をもって莊嚴された世界といわれることは、自己が自己を超えて答えられるということである。超越的な意味をもって実存が充足されるということである。超越的根底が世界として開かれるのであるから、本願によって自己が

自己に先立って問われ、世界として自己は自己の予想を超えて答えられるのである。人間的実存が人間的にでなくて超越的意味を以て充足されることである。人間的要求の撤回というが如きかたちで充足されることである。それは存在的に自体的に満たされること、実存が何かとしてでなく、存在そのものとして成就されることである。

自己の根底的自覚が親鸞の所謂樹心弘誓之仏地というものであるとすれば、莊嚴功德成就の世界を有つというところには、流情難思法界というに当るものがあるかと思う。それは願生の自覚に相応して生起するところの得生の感情である。曇鸞も得生者の情という。感情という限りそれは実存の意識に在るのである。それでなければ生ということも得ということも出来ないわけである。得生はどこまでも実存に於ける事柄である。然し曇鸞もまた無生の生という如く、存在の真理たるあるがままの影となっている感情である。純なる感情である。願生が超越的根底の実存的自覚であるが如く、得生はその自覚に於て開示され、またその自覚に相応する超越的意味の充足感情である。

無生或は不生は、法性といひ如理といわれてゐる如く、存在が何かの存在ではなくして存在それ自らとして存在たる存在の法爾性である。何かとして存在するものに就て初めて生起が語られ得るのである。何か存在するものがあればこそ、そのものが生ずるのである。生ずるものは同時滅尽するものである。生若しくは滅は、存在するものという存在の実体に就ての述語に過ぎない。実体的存在は考えられた形而上学的存在にはかならない。存在のあるがままなる法爾性は考えられたものの絶対的な彼方であり、また以前である。非安立といわれる所以である。

存在はあるものでなければ同時に無いものでも無いのである。すべて対象化の全き以前である。对象的思惟に先立って己に実存している。非安立なる存在こそ実存である。存在は実体や有無の存在範疇によって立てられるものではなくして、存在を維持するものはまた存在自身である。自然といわれる所以である。法爾といわれる所以である。実体ならざる存在こそ却って一切の何かの存在をして存在せしめている真理である。

かかる存在の法爾性から逆に生滅せる何かの存在をみれば、それは何かの存在は存在の何かである。不生のままの

生であり、不滅のままの滅である。それが純粹事実としての生滅であるといわなければならない。存在の真理とは一切をそれに於てあらしめるの謂いである。一切のあれこれの存在は、存在の真理に於けるものとして、相なき存在の相となるであろう。こうした存在の立場に於て実存の生というものの意義を考れば、実存の生は、存在の無生を象徴する相となったということである。得生者の生は無生を象徴する感情である。それはいわば、存在のかたじけなさともいふべき、実存の充足感情である。いまここに誰かとして生きてあることが、そのままに不生の存在を生きていることのかたじけなさである。

右の如き願生並びに得生という表現の意義を一般的な概念を以ていいかえれば、それによって宗教的自覚とか宗教的体験とかいうものが言表されているのである。宗教心というものが具体的内容を以て自覚的体験的に表現されているのである。

然し宗教の問題というものは自己実存の問題であろう。究極的には存在の問題であろう。自己の存在が問いとなることであろう。不安というが如き実存概念は最もよくこの意義を語るようである。宗教心というものが人間にその存在の問題を課するものであり、人間に存在を答えるものも、また宗教心であるということが出来るであろう。同時に存在の問題も宗教問題となるとき、始めて究極的な意味のものとなるであろう。願生並びに得生という言葉には、最も現実的な存在たる自己が最も究極的な存在たる自己として語られている。自己が自己よりも遠く、然もそれが自己よりも自己に近い存在として語られているのである。

願生は自己が自己の根元の存在に呼びかえされた自覚である。根元の存在はむしろ根元的自己である。存在の存在性は存在が存在のままであることである。そのままであることにも勝れて近いことではないであろう。最も近い存在は最も近いが故に却って深淵であるのである。

自己が自己のままであることは、却って自己に深遠であるのである。そのままが深遠なのである。対象的思惟の立

場に立っている意識に取っては、そのままたることは立場にかくされてしまうのである。そのままは立場の脚下として最も内面的である。そのままは内に深遠であるというも、そのままが自らかくれるのではない。意識が立場を取ることがかくすのである。そのままを思惟すれば思惟するほど深く、思惟の底を破って深い。然もその深みが実にそのままであることである。思惟すれば思惟するほど深いということは、それゆえ却ってそのままとして顕われているもしい得るのである。光明の深淵 *Abgrund des Lichts* という神秘家の表現もあることである。

そのままが深遠であるとは、やがて無限に豊かなる意味内容を蔵することである。蓮華蔵世界といわれる所以である。存在が思惟を超えて顕われていることが世界であることである。無底の根元は同時に無限に豊かなる意味を公開する世界であるのである。願生の心はかくして、人間をそのままの存在の根元にめざましめることによって、廣大無辺なる意味の世界に得生せしめるものである。ありのままが深遠にして廣大である。世界の広大性は実に根元の深遠性の広大なることを証明するものといひ得るであらう。深きものが広いのである。顕わなることは覆われたるものを現わすの謂いである。

かくして願生といひ得生という表現の意義は、宗教の問題が人間にその存在の超越的意味を問い、且つ答えることによつて、人間を自覚的実存として成就するところにあるを語るものといひ得るのである。宗教の問題は人間の存在の問題、存在の意味の問題である。人間存在の意味意識のあるところに、既に宗教意識が働いているのである。宗教心の根源としての本願は人間の願というよりも、人間をその存在にめざます存在の願である。法性心の願である。無願の願であるわけである。世界というも法性界として超世界的世界である。かかる意識によつて、本願は人間に忘却せる存在を恢復せしめ、喪失せる意味を見出ししめるものである。

さて存在の意味ということに就てであるが、世親が莊嚴功德成就というところのものは、実は如来自身であるとともに、如来の世界たる国土でもあるのである。国土として莊嚴された法身の意義である。身 *kāya* 十 *kuṣetra*

に対応して、所謂衆生世間と器世間との關係を有つのである。国土は環境を意味する器世間である。或は世間の環境的側面として衆生世間たる身を予想する概念である。身は自身というが如く、自体を意味する概念である。衆生それ自体及びその環境という世間の構造を表わすのである。二種世間が世界の構造である。清淨世間は如來自体と及びその国土である。無著は阿頼耶識を轉じて法身を得るといふ。菩提の願心は自己（阿頼耶識）を回轉して法身を成就せしめるの謂である。この二種世間の構造の表す關係を受用といふ。受用は生の關係である。環境を受用することによって自身を保持することが生である。随つて法身を受用身といふ。それゆえ世親も受用功德を安立して、愛樂仏法味禪三昧為食といふ。勿論これは一つの讚歌として、詩的表現であるが、功德は意味 Sun を意味するものとして理解することが出来るのではないかと思う。受用するのは意味を受用するのである。

世親は莊嚴功德に就て略説一法句広説二十九句として三類二十九種の功德を安立するのであるが、この種々なる功德の成就是、これを以て国土の国土たる意味を成就するがためである。種々なる功德はすべて受用さるべきものであるが、まさしく受用さるべきものであることを表現するのが受用功德の莊嚴の有つ意義である。それゆえ曇鸞も、論の三類二十九種をまとめて、仏国土清淨味、攝受衆生大乘味、畢竟住持不虛作味、類事起行願取仏土味といふ。われわれはこれによつて淨土の意義を種々なる意味の世界と理解することが出来る。

意味はいうまでもなく存在の意味である。法性の意味である。略説一法句の一法とは法性である、法性一味である。存在の法性の内に見出されるところの種々なる意味である。世親はこの略説一法句広説二十九句を自ら解釈して第一義諦妙境界相といふ。所謂唯仏与仏智見の世界である。一法句たる法性は第一義諦に属するもの、二十九種の功德は妙境界相の意義を有つのである。法性は無相であるが、種々なる功德は妙智の行ずる境界相である。無相の内に無尽の意味を受用するのである。受用するとは智をもつて観ずることである。解深密經にもその勝義諦相品に於て、勝義諦たる法性が遍一切一味相と説かれている。

存在の法性的の意味は平等一味の意味である。それは無限に豊かなる種々なる意味を蔵するのである。種々なる意味はそのままに法爾の意味を出でぬのである。それが一切の存在がそのままに自体満足し、各々に安立するをうるの意義である。そのままであることの意味こそ最勝義の意味である。無の意味こそが意味の意味である。

法性は、既に述べた如く、対象的思惟の対象にならぬものである。対象領域として立てられた存在はもはや存在そのものではあり得ない。しかし、いかにしても知られぬものは無という外はないであろう。存在それ自身も存在として知られたのでなければ一法も一法句と略説されることが出来ない。存在そのものの意味であるところの、そのままはそのままと成ることによって知られるのでなければならぬ。成ることが知ることである。これ即ち無分別智である。無分別もなお智であるのである。成ることが知ることであるが如き智は即ち自内証智である。対象的にとらえるのではないから、証というのである。成ることが知ることであるから自というのである。自証的自覚はそれゆえ最も直接である。そのままであることがそのままに知られたことである。そのままがそのままを知るのである。

かかる直接的な知りかたを、それゆえ触という。法性は自ら触さるべきものにして対象的に思惟されるのではない。対象的に考えられたそのままは、そのままではなくして、そのままという表象に過ぎない。Sinnには触覚というが如き直接的な経験の意味をも意味するのである。存在の意味は触れられる意味である、味覚される意味である。Sinnにはかかる sinnlich な意味があればこそ、実存たる人間を充足することが出来るのである。

しかし Sinn は同時に意味たる意味に於て、どこまでも超越的である。超作用である。そのままがそのままであることは事実とか作用とかを超えて、そのまま自身であるのである。そのままには Wahrheit an sich というが如き意味がある。如理といわるる所以である。そのままはそれ自身によってそれ自身を維持しているのである。それを知るから知らざるかに無関係である。それゆえ解深密経にも、如来出世若不出世、諸法法性安立、法界安住という。

真理はそれを知ることによりてあるのではなく、知らざることによって無となるのではない。真理は不変異である。

かかる超越性を有つところに意味の意味するところがある。然しかかる意味の意味性も、それが不変異にあるといわる限り、あるといい得る場がなければならぬ。然らずは不変異であるともいい得ぬのである。超越性は無関係と
いうことではない筈である。勿論それを受ける場は対象的思惟の意識ではない。触といい証というもやはり意識なのである。無分別の意識である。無の鏡である意識である。かかる無の鏡たる意識を場としてありのままは始めて用ら
くのである。

やはり意味の用らく場というものがなければ、超越的ともいうことは出来ぬのである。無の意識こそ、そのままを
そのままの意味を開示する場となるのである。存在にめざめた心は無の鏡となつた心である。心は自らを空くするこ
とによって存在をありのままに語らしめるといふことが出来る。存在にかえつた心である法性心に心法性は自らを開
示するのである。意識が自ら存在にかえれば、かえつた自覚に存在の意味は用らくのである。用らくことによって意
味は意味を失うのでなく、超越のままに実存にかかわることが出来るであらう。

浄 土 真 宗

動乱の現世を超えて、静寂の浄土に向ふ。これを往相という。浄土のさとりを身につけて煩惱の人生に順応す
る。これを還相というのである。しかるに、その往還は、自力の歩行ではない。ひとえに如来の本願力に依るの
である。即ち、本願力の廻向によりて、往還は、この身に成就するのである。したがって、往相には還相の復が
具わり、還相を体として往相が現われるのである。しかれば、往還というも、ただ本願力を信証するの他ないで
あらう。それを指示するものは、**真実の教行**である。

これによりて、本願の教法を**浄土真宗と名ぶ**のである。

金子大栄著『口語訳教行信証』領解より